

available from URL. <http://www.yakuhan.co.jp/index.htm>

インシデントの再発防止について ～効果的なグループワーク研修を考える～

3-7 病棟 佐藤斗子 吉田 奈々
佐々木 瞳

I. はじめに

近年、医療安全に対する関心は高く、医療安全対策としてのインシデントレポートは医療界で定着しつつある。当病棟でもインシデントレポートによる情報提供をしているが、インシデントの件数が減少しないのが現状である。そこで今回グループワーク研修に取り組み、その結果研修が効果的であったためここに報告する。

II. 研究目的

1. インシデントの再発防止には、グループワーク研修が必要であることを検証する。
2. 今後に生かせるような効果的なグループワーク研修を考える。

III. 研究方法

1. 期間 平成24年11月～平成25年3月
2. 対象者 3-7病棟看護師17名
3. 研究デザイン
 - 1) アンケートによる自記式質問紙調査の実施
 - 2) グループワークは討議形式で、事前にSHELL分析を行なった
 - 3) 倫理的配慮
事例は、患者の背景を架空設定とした

IV. 研究結果

アンケートの回収率は100%であった。まず、SHELL分析の実施については、できた11名(65%)、できなかった2名(12%)、どちらでもない4名(23%)であった。回答の中では、「グループワークで気づくことができた」「実際に行っ

て難しかった」という意見があった。SHELL分析の必要性については、15名(88%)の人が必要であったと回答している。グループワークは効果的であったと思うかという質問については、17名全員が思うと回答している。その理由には、「違う視点で考えることができた」「口に出して考えが共有でき安心がもてた」という意見があった。事例については、実際の事例を検討したため考えやすかったという意見があった反面、実際の事例のため当事者がひどく反省してしまうのではないかという意見があった。研修1ヶ月後の自己の変化については、「意識が高まった」「対応時に勉強会のことが思い出された」という意見があった。

V. 考 察

インシデント再発防止に向けて、グループワーク研修を行ない、アンケート調査による研修の効果と効果的な研修のあり方を検討した。

まず、アンケート結果より、全員がグループワークは効果的であったと回答している。その理由として、違う視点での見方の発見や発言することによる共有や安心感と答えている。日常では、時間の制約やナースコール対応などからじっくり話し合う機会が少ないため、研修での意見交換は有意義であったと考える。また今回の事例は、ナースコールが関与しており、実際の具体的な行動も一つの視点であった。研修では、業務の中で、それぞれの役割を担いながらお互いナースコールを意識していこうという結論に達し、研修後ナースコール対応が早くなったように思われた。個々のみならず全体での意識の変容がインシデント再発防止には必要である。

次に効果的なグループワークについて考えていきたい。事例については、より具体的であったほうが原因分析や対策が考えやすいと考える。しかし、具体的な内容は、当事者に不快な思いをさせない配慮が必要と思われる。研修前のSHEL分析については、状況のイメージ化による早期なディスカッションへの導入として必要であったと考える。またグループは、経験年数が異なった人で構成したが、活発な意見交換が行われた。グループワークは、情報や分析を共有しお互いコミュニケーションに努めていくことが大切である。

救命救急センター病棟における 災害シミュレーション日常点検編の実施と評価

VI. 結 論

1. インシデント再発防止にはグループワーク研修は効果的である。
2. 効果的なグループワークとは、より実際に近い事例を使用し、事前に分析を試みる。そして、様々な視点で意見交換ができるようなグループ構成をし、よりよいコミュニケーションが図れるような雰囲気で行われる研修である。

救命救急センター病棟 三浦 智美 田上 全子
松村 葉子

I. 序 論

2011年7月に災害看護学会で紹介された病棟災害シミュレーションの方法を参考に2011年10月から「救急病棟災害シミュレーション～日常点検編～」(以下、災害シミュレーション)の導入を開始した。その実施内容および評価について報告する。

II. 倫理的配慮

災害シミュレーションは無記名で実施。内容についてはスタッフの評価ではなく、その時の判断が最良であるという前提で記入を依頼。災害シミュレーション実施に関する活動は院内外の研究発表会で紹介の可能性があることを口頭で説明し了解を得た。

III. 結果と考察

災害シミュレーションは「院内重症集中治療の場における成人用備えケアパッケージの検証」¹⁾の一部を参考に病棟でスタッフが毎日負荷なく実施できる内容を検討。現在の勤務帯の看護師の数、総患者数、今日一番に駆けつけなければならない患者、その患者を選んだ理由、担送患者数、重症患者数、人工呼吸器装着中の患者の数、待機家族の人数、退室

可能患者という9項目を表形式で明示したA4用紙を1枚作成。毎朝リーダー看護師が申し送り時に内容を発表し用紙はファイリングしていった。今回は2011年10月から2012年12月末日までの災害シミュレーション430件を分析し記述内容の傾向や項目の妥当性について考察した。救急病棟に入室する患者の多くは病態が安定していない、もしくは集中治療が必要になる。そのため一番に駆けつけるのに循環動態の不安定な重症や術後患者を選択している傾向があった。災害シミュレーションではスタッフの思考の柔軟性を考え災害の規模については明言せずに患者を選択するようにしている。また搬送の手順などに関連した項目も設けていない。そのためどのように搬送するかといったイメージ化には至っていないと推測する。災害シミュレーションは実際入室中の患者を対象者として連日実施でき方法が簡便であるのが利点である。そこに災害の想定や搬送手順を問う項目が加われば思考がより具体的になる可能性があるため今後検討していく必要があることが示唆された。災害シミュレーションは日々仕事をしている時に手を止めて災害時の対応を考える機会になり訓練として有効ではある。しかし簡便で毎日実施と